

「今、私の晴雨計は！④」

「シルクロードの夢は

半ばで……」②

平山征夫

旅の六日目、いよいよタクラマカン砂漠縦断だ。「入ったら帰れない死の海」という意味で日本の国土にも匹敵するこの巨大な砂漠を南北突っ切る四二〇kmの「砂漠公路」を含めクチャ市までの六五〇kmの大移動だ。

ホータンを出て暫くして砂漠地帯に入る。よく写真などで見る砂丘が連なるというのではなく比較的平らで、砂の色も灰色だ。だから「月の砂漠」の童謡のイメージには程遠い。そのうちに道路の両サイドに植林された風景が

見えてきた。この砂漠には二つの公路があるが、ほっとけばあっという間に砂で埋まってしまう。そこで道の両脇に植林をして飛砂を防ごうというのだ。この広大な事業の提案実行者は日本人の「遠山正瑛」という乾燥地開発研究者だが、彼は一九九一年以降多くのボランティアを引き連れてこの地に四〇〇万本の苗木を植えた。驚くことにその時彼は91歳だった。その後も日本から多くの支援が入っていることは、同じ「にいがた緑百年物語」という木を植える県民運動を主催している私としては嬉しいことだ。砂漠ではなかなか木は育ちにくい。一番砂漠に適しているのが「胡楊」で、この地域でも自生

している。「胡楊は生きて千年枯れず、枯れて千年倒れず、倒れて千年腐らず」と言われる砂漠最強の木だが、植林しているのは次に強いと言われる「タマリスク」だ。水を求めて何処までも根を張るという。市街地では防砂効果が高く、日陰も造ってくれるポプラが多く、美しいポプラ並木をあちこちで見ることが出来る。ただ、最もシルクロードらしい風景だったポプラ並木を老人がロバ車で行き交う風景はもう見られない。ロバ車は小さな三輪自動車にとって代わられていた。

頼された。止せばよいのに少し手を入れた。うる覚えながら「来てみれば 砂漠も我が家も タマリスク」となったと思う。お金は溜まらず夫婦間の危機ばかり溜まるのを詠んだと言うが、全然そうは見えない仲睦まじさだ。クチャ市に入る前にタリム河がある。バスを止め河川敷に降りて自生する胡楊に触れた。巨大な胡楊の樹は生きているのか、枯れてなお立っているのか分からなかったが、ずっとここに立っていたと思うと撫でる木の幹もシルクロードの歴史だ。翌朝、クチャ観光に出ようとすると小雨が降っている。こんな年間降雨量数ミリという砂漠地帯でと思っていると「今年は気候が変

で、四月以降もうこれで10回くらい雨が降っている」とガイドさん。クチャは紀元前から12世紀くらいまで亀茲国というオアシス都市国家が栄えた処だ。九世紀頃までは仏教を大切に保護したことで、今でも多くの仏教遺跡が残っている。その代表がキジル千仏洞だ。畑やポプラ並木を抜けると山の壁40m位の高さに千仏洞が展開、その麓には玄奘と並んで經典の訳僧で有名なこの地出身の鳩摩羅什の大きな像が立っていた。小雨とはいえ傘を差しながら石窟を見て回った。全部で三五〇窟あるがそのうち「音楽窟」として亀茲楽を表現している特別窟38窟など七窟を案内してもらった。二十世紀の初めここを

大々的に調査したドイツの探検隊の隊長ル・コックはラビスラズリーの藍の美しさと贅沢な使用に感嘆したと言う。その片鱗は少し感じられたが、それより「随分荒れているな」というのが正直な印象だ。赤色が黒っぽく変色していることもあるが、はがれた部分が多いのだ。説明ではル・コック隊が三〇五箱分も壁を剥いでベルリンに持ち帰ったことと、近年この地方を襲った地震によるそうだ。七窟見たと言ってもそのうち二窟は僧が寝泊まりや事務所とした窟で、もともと壁画のない窟だ。他も随分荒れているのだからと思われた。

敦煌・莫高窟やその近くの榆林窟に比べると石窟の構造(前室と後

室に分離)も絵の感じも異なり(仏画は菱形の図案内に書かれている)、中国仏教の影響ではない印象だ。ル・コックは「インド・ペルシャ風だ」と言っているが、当時のウイグル人は仏教を信奉していたが、それはインドから伝わったものだろう。かなり前だが上野の東京芸大でこちら新疆の芸大との交流記念で行った「キジル千仏洞の石窟壁画展」というのがあったことを思い出した。帰国後調べてみたらそれは千仏洞の壁画を模写した絵の展覧会だった。本格的修復作業が必要なのだろうと思った。

そこから「クズルガハ烽火台」に行った。漢時代に匈奴の動きなど危急を知らせるために15km毎

に造られた烽火台で唯一残っているものだ。それだけでなくサソリに刺されて亡くなるという予言を受けて、王がこの烽火台の最上部に姫を隔離したがリングに隠れて忍び込んだサソリに刺されて死ぬという伝説も伝わっている。ここで我々には伝説ならぬハプニングが起こった。

この烽火台を見るため川底に造られた橋(潜水橋とか沈下橋という)を渡った時は川に水は流れていなかった。見物して40分後に戻るとさっき渡った橋は濁流の中にあった。既に雨は上がっていたが、上流に降った雨が砂漠地帯の恐ろしさで一挙に下ってきたのだ。対岸に来る車もバスも引返してゆく。迂回路はないという。

渡るにはリスクがありすぎると判断、上流からの水量が減少するのを待つことにする。二度目の青空トイレの体験も含めて待つこと三時間、しかし水量は一向減じる様子はない。「ここで徹夜か！」とチラツと頭をかすめる。「どうするんだ」という皆の目に「現在会社と相談、ここを渡れるボートの手配中です」と苦しそうに説明するガイドさん。その時、対岸に表れた一台の黒色の乗用車、迷うこともなく濁流に突っ込んできた。真ん中の一番流れの激しいところでスピードが緩む。窓から水が入るギリギリの線だ。思わず「危ない！」と叫んだが、車は再びスピードを取戻すと一気に渡った。渡りきった車の下半身から

大量の水が落ちた。聞くとこの地域の住民家族だが、「経験からギリギリだが渡れる」と判断したそう。そこでわれわれも「座高が高いから横転のリスクがある」という慎重論者も居たが、「乗用車が渡れたのだから」と判断して渡ることにする。濁流の圧力を感じながら運転手さんは冷静にバスを乗り入れる。ゆっくりだが負けない確実な速度で走らす。真ん中の最難関を渡った時と対岸に到着した時には大きな拍手が起こった。

長いから出来た訳で、北京時間にこの時は感謝だった。暫くするとOさんが添削依頼に来た。どう直したか正確には覚えていないが、出来た川柳は、濁流に閉じ込められたは、クズルガハ（ぐずる河）だ。

（平成30年7月30日）